九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

野村吉三郎「非常時とわが国民の覚悟」

三輪, 宗弘
九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門 : 教授

https://doi.org/10.15017/1434343

出版情報：石炭研究資料叢書. 35, pp.148-165, 2014. 九州大学石炭研究資料センター
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

野村吉三郎「非常時と我が国民の覚悟」

解題

三輪宗弘

国民教化事業協会『非常時と我が国民の覚悟』（国会図書館の請求番号 YD5-H-特249-812、昭和一〇年）は、野村の講演二本「非常時と我が国民の覚悟」、「非常時と我が国防」およびフォリンアフェアーズ誌に掲載された論文「日米を繞る軍縮問題」からなっている。二つの講演を取り上げ、野村論文「日米を繞る軍縮問題」は削除した。前出の「非常時と我が国防」という同じタイトルの講演であるが、内容には差異があるので、紹介した。解説の重複は避けたので、先の解題とセットとしてお読みいただきたい。

国民皆兵の主義をとり戦った日露戦争時には、国家資源の動員があつたとし、「欧洲大戦には各国の国家総動員は極めて顕著」であり、「将来の大戦争は国家総動員の下」に行はれる以上、「平時から準備」しなければならないと指摘する。ここには第一次世界大戦がもたらした国家総力戦という考え方が垣間見える。

「現役軍人は政治運動」をやるべきではないが、「国防の全局」ということも大事で、軍人も「社会の状況思想産業財政経済其他政治に関心を払はねばならぬ。」とし、一方国民も「文官も国民も国防は軍人のみの任事にあらず直に自己頭上の問題として関心」を持ち、軍人に任せて、われ関せずという態度を取るべきでないと野村は考えている。野村には第一次世界大戦時のドイツが念頭にあり、すでに紹介したように「軍人が戦闘に勝つも国民が戦争にまける結果を来すことがある独乙の如き然りである。」という鮮烈な印象が脳裏から離れなかった。野村の哲学が貫徹している文章を引用しておこう。

「上下交征利国危しである油断は大敵である、又余り排外思想を煽つたが如きも慎むべきである。日本は今の状態にては外国と共栄の策をとらねばならぬ維新以来の開国進取的国是を推し広めねばならぬ、頑冥固陋独り貴しとするが如きはとらざる所、大に我長を益々養ふと共に我短所をも知り天空海濶益々大なる国家精神を養はねばならぬ。」

ここで野村は排外思想や排他主義を戒め、「頑冥固陋」の美化するイデオロギーに批判的で、「外国と共栄の策」を提唱し、我が短所を知悉することの大切さを説く。

野村は産業という観点からも海外貿易に頼っている現状を十二分に認識していた。「自給自足」の経済論にも言及しているが、野村の国際協調主義が溢れている。当時でこのような考え方を持っている点に私は感嘆を感ぜざるを得ない。

「日本は国防の見地よりも又国民生活の上よりも産業を盛んならしめ貿易を盛んならしめねばならぬ。」と述べ、連盟脱退当時日本は経済封鎖に堪へ得ると云ふ信念より自給自足の経済論が盛んであつた。」と指摘したうえで、「国家経済主義に立籠り其結果貿易は益々萎縮し各国の不況を激化しつゝある。これはやがてもつと種々の障壁が取去られ自由貿易に近き状況即ち多少統制を加味したる門戸開放自由貿易に復帰することであらうと専門家より聞く所である。」と述べる。野村が自由貿易を是認していることは明らかであろう。「私は米国勤務であつたが米国大統領は議会より特別の権力を与へられ随分思切つた

事をやりました『デモクラシー』の自由主義、個人主義は吹き飛ばされ日本の政府に在てはとても実行し難かるべしと思ふ事を断乎として徹底的にやつた、これは吾人能く記憶し置かねばならぬ。」と米国での体験を披露する。自由主義、個人主義といわれている米国が、挙国一致で「自由主義、個人主義は吹き飛ばされ」た米国のデモクラシーを野村は眼中に収めている。野村の国際協調主義が「自由主義」と「個人主義」の中心に表明されており、海外での体験で裏打ちされている。

四年前の満洲事変を「陸軍の偉勲」ととらえ、上海事変が起り「日本と列国との感情は随分隔離し連盟脱退の事ありしが年と共に漸次収まつて来た。之は列国には戦ふ能はざる事情があり又日本国民の決心が強く陸軍も海軍も敵に廻しては中々強いから彼等は控目に出たのである。」と述べ、力の均衡の意義も指摘する。ここでも軍縮条約への見方が述べられているが、同工異曲なので、先の解題をもう一度お読みいただきたい。

野村の哲学では、戦争は「国家の死活存亡」の時にのみ賭すことができる。日露戦争は「我国は止むに止まれず開戦し国運向上を来したが」、第一次世界大戦で欧州は 戦勝国も敗戦国も非常に疲弊し、「今日の困難を招来した、独乙の如きは戦闘そのものに捷ちつゝあつたが戦争には敗れた、それは国力士気の挫折其背後には経済力の行詰りがあつた。戦争に於てうまくやつた国は米国と日本である。」と述べ、米国は「丁度徳川である豊臣秀吉は那翁以上の大傑人であつた支那四百洲迄も征服せんとし、先づ朝鮮を征伐し大に武勇を揮ひ国威を発揚したが其隙に徳川は力を養ひ終に豊臣に代つたそれに似て居る。」と軍事を過度に用いることの弊害を豊臣秀吉と徳川家康を対比しながら、巧みな比喩で論じている。この比喩は野村の好きな比喩で、例えば戦後の昭和二十四年に書いた「米・対日策の真意」（『速報　先見経済』（昭和二十四年二月号、第二四号、三九頁）にもみられる。

北条時宗は元寇の困難に当り克く果断以て困難を救ひ大に神洲男児の面目を挙げた。それは「時宗として戦ふより外に途がなかつた」と指摘し、日露戦争後も「亦百方平和維持に努めたが最早戦ふより途がなかつた」のであると共通点を指摘している。司馬法の「国難大好戦必天下雖安忘戦必危」で締めくくっている。野村の戦争観が端的に述べられている。さらに野村らしい書き方を拾っておこう。

「徒に外国を挑発する事なく静かに自ら備ふべき備へを以て万一の用意をなし置くべきものである。」

「軍備には金が入るが国民の時局に対する認識の深浅によつて定まる問題で戦争になつた場合と比較して考ふれば其負担たるや比較にならない程軽いもので結局一番安価で我国策を支持し得ると云ふ事となるのである。油断し備へを怠らば戦争となる危険が多くなる」

過度の軍事依存もいけないが、油断して備えを怠るのも「戦争となる危険」が高まるとしている。野村の野村たる所以がある。「末梢的揶揄」「嘲弄交換」は何の益にもならず、「大乗的共存の大道」の開拓を説いている。

次に「非常時と我が国防」を紹介しよう。先に活字にした講演と同じタイトルであるが、日本青年館で開催された東京市連合青年団の大会の講演速記である。

前出の二つの講演とほぼ同じ内容であるが、日露戦争当時、ロシアの勢力が如何に強かったかが述べられ、上述の講演と同じく経済封鎖に触れ、「先年経済封鎖などの問題があつた時に、日本は外国と貿易をしなくても大丈夫だと云ふ説があつた、非常時に対してそれ丈けの備へがなくちやならぬ。然し、紡績などは今の所到底出来ない事になる。」と指摘し、日本の紡績の原料である綿は「米国及印度から五億、六億」で購入し、「日本の工業力でこれを綿糸、綿布に仕上げて、外国へ輸出してゐる。羊毛　濠洲から来る、これも一億以上来る」と日本が海外に原材料を依存している現状を踏まえ、国際貿易の大切さを説いている。

満州事変以降の国際情勢への見方を眺めよう。

満洲事変、上海事変、連盟脱退という流れを俯瞰して、「満洲、上海に干戈を交へたが、これは大規模な戦争にもならず、今日満洲は独立国として成長し日本の力によつて着々発展しつゝある。」「鉄道は縦横に延び、土匪はだんだん減つて来る」「連盟脱退に伴つて南洋諸島の、日本が委任統治をやつてゐるあの島々の帰属問題などが一時議論されたけれども、それも現状維持になつて、今日連盟でもあまり問題にしないやうな状況」になっているとしているが、昭和一〇年頃の受け止め方である「今迄の処うまく来てゐる」という認識を知ることができる。

英国と米国に関しては、前の英国総理大臣マクドナルドは労働党出身であったが、「条約とゐひ、平和機構といひ、多く頼ることは出来ない。」「これから建直さなければならぬといふやうに頭が変つてゐたのであります。」と述べている。軍港シンガポールの拡充も記述されている。

英国も、米国も「東洋問題で往々両国の協調はあり得べき事で、両国の関係には注意を怠らない」のが大切だと説いている。すでに触れた「比島又グワム島に大なる海軍根拠地」や「フイリツピンの独立問題」「ハワイの真珠軍港施設」に紙幅が割かれている。繰り返しになるので、解題で言及するのはこれくらいにしておこう。本文を熟読されたい。

野村の軍や戦争に対する哲学を拾っておこう。野村の英知は今も輝きを放っている。軍事とどのように向き合うべきか、野村を通して考えることは有益であろう。

「海軍のための海軍拡張であつたり、陸軍のための陸軍拡張であつたり、相競つて国民の財布を奪つて行くといふ、かうなつたら大変でありまして、それでは国防が財政を壊すやうになる、」

「あまり空騒ぎはよくない、犬の遠吠のやうな態度を始終採つてゐるといふことは、決して国家を利益するものではない。」

「要するに軍備というふものは相対的のものである。彼も少なければこつちも少くていゝのだ、国民もさういふ方面で、各国との関係もよくする様協力するのが当然であらうと思ふのであります。」

「また国民も現実をよく透視して、大国民の態度を以て善処することが必要であります。」

『東洋経済新報』（昭和二十六年八月十一日、第二四八五号、二七頁）の坂西志保との対談「対談　十二歳の日本人」で野村は以下の様に振り返っている。

「人の問題では、雷同性、それから個性がないことだね。いろいろな著書を見ても、軍閥盛んなる時代には軍閥に強調し、政党盛んなる時分には政党に協調しておいて、いまになつて軍閥が悪い、政党が悪かったのだというだけ言つて、自分だけは聖人君主のような顔をしておる。これをずつと並べてみると、随分平仄が合わんのでね。」

以上解題まで。

はしがき

すぎし世界大戦の遺産、描かれた平和の殿堂寿府！　これは今では夢心地こそすれ西欧の空にS・O・S見よ黒雲に掩はれた地中海の波また穏かならず、国際政局こそ非常時である。秋に日本帝国海の護り海軍の巨星野村提督から又と得難き玉稿を戴くことが出来た。恐らくかゝる草稿を戴くと云ふことは、之を以て初めてであると同時に終りであらう。

その玉稿を親しく拝読するや、この儘筐底に秘蔵するに忍びず、非常時日本の第一線に立ち国民を指導しつゝある人々に、この喜びを頒ちたいと思ひ国民教化シリーズの第一輯とした。わたしはかう云つた機会に恵まれたことを心竊かに喜ぶと同時に、此の冊子を手にせられる諸賢は、わたし以上の感激に踊ることを信じて疑はないのである。

今更、野村提督に就て説明を試むることは、一部の人々から愚の謗りを浴びることを十分承知しながら、茲に簡単ながら野村提督の一言を附加する。

提督は諸賢も知られる如く、上海事変に於ける海軍の総帥である。国際関係の最もデリケートな国際都市上海に派遣艦隊司令長官として軍事、外交の両方面に飛躍され、その偉大なる存在は斉しく各国人の認識する所であり、わたしがこゝに語るまでもないのである。

提督は黒潮渦巻き競ふ吾が蜜柑で名高い紀の国の産である。

氏和歌山藩の士族増田喜三郎氏の三男として、西南戦争の余燼未だ消えやらぬ明治十年極月封建の古へを誇る五十五万石虎伏城下に呱々の声を揚げたのである。後ち野村姓を襲ぐ。三十一年海軍兵学校を卒業、累進して昭和八年三月海軍大将に親任されたのである。所謂位人臣を極め、而も誇らず黙々として己の所信に邁進し我れこそは非常時帝国を荷ふ一人を以て許されて居る。この間駐在武官として独墺に滞ること数年、音羽の副長、海軍省副官兼海軍大臣秘書官、米国大使館付武官、八雲艦長、巴里講和会議全権随員、再び海軍省副官、華府会議全権随員、軍令部参謀、東宮職御用掛、第一遣外艦隊司令官、海軍省教育局長、軍令部次長、練習艦隊司令長官、呉、横須賀両鎮守府司令長官、此の間上海遣外艦隊司令長官として、上海事変に出征した。事変後勲功に依り、功二級金鵄勲章を賜ふ。

今日海軍部内に於ける智将として軍事、政治、経済、外交に於ける豊富なる閣下の所論は誰しも傾聴する所であらう。わたしはかゝる権威ある所論は所詮聴く機会があり得ないことであるから、一人でも多くの人々に此れを頒ち、共に喜びたいと思ふ次第である。

どうか諸賢よわたしの意のある所を識つて欲しい、そしてこの聴き

難き野村提督の所論とその抱負を多くの人に知らして戴ければ又となき光栄な次第である。

どうか諸賢よわたしの意のある所を識つて欲しい、そしてこの聴き難き野村提督の所論とその抱負を多くの人に知らして戴ければ又となき光栄な次第である。

なほ附録として野村提督が嘗つてアメリカの有力誌フオーリン、アフエアス誌に寄稿した論文（原文の邦訳）日米を纏る軍縮問題――宿題の軍縮を中心とする日米関係を知る最も有力な資料たるを固く信じ、こゝに再録することは決して徒爾ではあるまいと思ひ、閣下の承諾を得て再録する次第である。宜しく精読を乞ふ。

之を以て私は――非常時と我が国民の覚悟――刊行の総てをご報告いたす次第である。

皇紀二五九五年秋季皇霊祭の吉日を拝して＝山崎賢一識す＝

目　次

題字
近影
筆蹟
非常時と我が国民の覚悟
非常時と国防
日米を纏る軍縮問題

非常時と我が国民の覚悟

海軍大将　野　村　吉三郎

国防就中海軍に付てである。明治の御代に日清、日露の両戦役あり、国運が非常に発展したが、其の戦捷の大原因として第一に万邦無比の我国体に思を致さねばならぬ、一旦事あれば我国民は天皇陛下を中心に挙国一致忠君愛国――の塊りとなるのである。軍隊は殊に然りである、軍人に賜はりたる御勅諭――これは一般に拝読すべきもの――朕は汝等軍人の大元帥なるぞされば朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてぞ其親みは特に深かるべき――汝等皆其職を守り朕と一心になりて力を国家の保護に尽さば我国の蒼生は永く太平の福を受け我国の威烈は大に世界の光華ともなりぬべし……と仰せになつて居られる。又下級のものは上官の命を承はる事。実は直ちに朕が命を承はる義なりと心得よと御論しになつて居るのであつて、軍人は大命一下生死を問はず水火の中へも絶対服従をなし上命を全ふする様断へず修養するのであつてこのことは最早軍人の天性となつて居るのだ。私は一旦戦争とならば廣瀬中佐、橘中佐の如き軍神は将来に於ても続続輩出するを信ずる者である。上海事変の時の将兵勇気を見ても、今の人達は日露戦争の時と何等かわりがない航空の如きは初陣ではあつたがよく奮闘し我が歴史に相応しき活躍の記録をのこした。明治天皇は五箇条の御誓文中にも（四）旧来の陋習を破り天地の公道に基くべし（五）知識を世界に求め大に皇基を振起すべしと仰せられ明治の御代に極めて積極的に進取的に盛んに経綸を行はせられ――日本精神の涵養と共に欧米文化を取入れ、和魂洋才であつたから日清、

日露の役にもあの成果を挙げ得た、凡そ戦ひの勝敗は精神が第一である。同時に艦船兵器等は時代に後れざるのみか寧ろ時代の尖端を行き敵の意表に出づる様工夫せねばならぬ。日清戦争には我艦小なりしも尚速射砲あり、日露役に於ては我個艦は優秀なるのみならず臥薪嘗胆十年随分よく準備してあつた。山本海相の事の成るは成るの日に成るにあらずと云つたのは根拠がある。そこへ東郷長官の如き絶倫なる名長官出で其幕僚亦実に傑出し其部下の将兵も亦卓越して居つて充分なる訓練稽古をやつたからあの成果を得た。長官は能く有名無名の無数の勇士の戦闘力を発揮さした処に名将の手腕を見せ又其部下のものは各其職を守りてよく戦闘力を発揮したから捷てたのであつて、名将の得易からず其の偉業を追慕すると共に其部下の或は捨石となり踏石となつた多数の犠牲者に対しては決して尊敬の念を忘れてはならぬ事である。

日本では夙に国民皆兵の主義を採り日露戦争の時に至つては大分国家資源の動員があつた。而し欧洲大戦には各国の国家総動員は極めて顕著である、将来の大戦争は国家総動員の下に行はるゝのである。それには平時から準備して置かねばならぬ、此の点に於て国防と一般の政治とは不可分となつてくる、御勅諭は軍人の金科玉条であるが其内には「世論に惑はず政治に拘らず只々一途に己が本分の忠節を守り云々」と仰せになり現役軍人は選挙権被選挙権なく又軍職以外の職に付く時は予備となるを例とする――二三の例外はあるも――さて現役軍人は政治運動をやつてはならぬが国防の全局に関しては社会の状況思想産業財政経済其他政治に関心を払はねばならぬ。又軍人以外即ち文官も国民も国防は軍人のみの仕事にあらず直に自己頭上の問題として関心を払はれ然も其間にあつて各々冒すべからざる境界を守らねばならぬ次第である。此等の点に付て予め充分の用意をなして置かぬと軍人が戦闘に勝つも国民が戦争にまける結果を来すことがある独乙の如き然りである。

国家総動員の上の戦争とは言へ矢張り精神力が第一である。国民の精神を強化し軍人精神を強化すると云ふ事は政府及国民の第一に努めねばならぬ事である。之れが為めには外来の悪思想、我国体を破壊する思想は撃滅せねばならぬ。金により爵や勲章を世話し議員に勅選の世話するが如きは国民精神を毒し又此等の点に付て軍人心理に悪影響を及ぼす。九、一八事件以来国民志気の作興は誠に喜ぶべしだ然し今時弊害もある社会各層に於ける相剋主義、排他主義これは人口の増加人の増加に伴ふ現象なるもこれは道徳を以て調節せねばならぬ。上下交征利国危しである油断は大敵である、又余り排外思想を煽つが如きも慎むべきである。日本は今の状態にては外国と共栄の策をとらねばならぬ維新以来の開国進取的国是を推し広めねばならぬ、頑冥固陋独り貴しとするが如きはとらざる所、大に我長を益々養ふと共に我短所をも知り天空海濶益々大なる国家精神を養はねばならぬ。

国家総動員の国防の上に於て形而下の発展及ち物質文明は極て必要である、固より我国は国土、人口、物質に於て某々の国よりも劣れりとて国が劣つて居ると云ふ決論（ママ）にはならない、我国の貴さは厳然として存する。然しながら今日の物質文明を以て満足する訳に行かぬまだ〳〵努力を要する。

日本は国防の見地よりも又国民生活の上よりも産業を盛んならしめ貿易を盛んならしめねばならぬ。連盟脱退当時日本は経済封鎖に堪へ得ると云ふ信念より自給自足の経済論が盛んであつた。この研究は必要であるがそれは非常の場合である今日各国は種々の原因より国家経

済主義に立籠り其結果貿易は益々萎縮し各国の不況を激化しつゝある。これはやがてもつと種々の障壁が取去られ自由貿易に近き状況即ち多少統制を加味したる門戸開放自由貿易に復帰することであらうとは専門家より聞く所である。世界的悲境の間に独り日本の貿易は四十億に達せりと云ふも世界に於ては第七番とか之れ位の小成に安んじて居れない。戦時には所謂産業動員が行はれ造船業、飛行機工業の如き所謂軍需工業は益々其製造力を増加し或る産業は戦争用に転向せしめられ戦時全く要なきものは一時中止する等は欧洲大戦の時各国がやつた事である。私は米国勤務であつたが米国大統領は議会より特別の権力を与へられ随分思切つた事をやりました「デモクラシー」の自由主義、個人主義は吹き飛ばされ日本の政府に在てはとても実行し難かるべしと思ふ事を断乎として徹底的にやつた、これは吾人能く記憶し置かねばならぬ。

日本は今日七億円余の棉を買ひ、一億八千万円の羊毛を買つて居る其製品は外国へ行く羊毛の代用品も出来るさうだが当分此状況は続くものと思ふ。生絲は衰へたがその代り人絹が外国へ出て居る鉄は不足し「スクラップ」百四十余万噸銑鉄は百万噸を輸入し一億円以上買ふて居る是れは大問題である。かう云ふ基礎工業は自国の力を以て自国の生産を以て、需給関係を調節し得てそうして戦時には大に生産を増加し得る様なつて居らねばならぬ。最近重油、ガソリンの需要激増しつゝある已に年額二百万噸価一億近くに達す、之は主として外国品である、北樺太及内地より五十万噸出来る、而して最近は石炭の低温乾溜、石炭の液化が工業化せられ、満鉄にてはオイル、シエールより石油をとりつゝある、此等の工業製品は戦時重油が騰貴する場合、又採算を顧る用なき場合、相当金をかければ若干産額を増加し得る油は英米が最も力を注ぎし所にして英国の如き欧洲大戦の間と雖も「メソポタミヤ」に着眼し又米国の如きは国内に非常の産額あるに係らず外国に着眼を怠らず、此等の点に於て日本は大に立遅れた今日と雖も機会ある毎に内外に開発せねばならぬ。

自動車工業の如き大に立遅れた、之も速に自給自足の地位に至らねばならぬ、飛行機も陸海軍が大に力を入れつゝあるが故最初は多少立遅れであつたが近時大にもち上げつゝある。飛行機は近代戦争に於て甚だ必要である、艦隊戦に於ても艦隊は有力なる飛行隊を随伴し必要に応じ敵状を知り敵の飛行機をやつ付け所謂上空を制し以て我艦隊を有利に戦はしめねばならぬ、又海上より敵地を脅威し得るのである陸戦に於ても今日飛行機は敵の防禦線を越へ遥々背後の戦略要点等を攻撃し得る。先んずれば彼を制す飛行機は最も此特長ある。そうして我軍人の精神に合致する、是に於て力を飛行機の製造技術に入れ欧米を凌駕し且技能優秀なる操縦者を十分に持たねばならぬ、此は我国に於ては陸海軍が主として指導せねばならぬが軍以外の民間に於ても今一段と熱心があつて欲しい。先づ望む所は航空路の開拓である、朝鮮、満洲、台湾、南洋等に至る航空路の開拓は焦眉の急であるそうして之に必要なる操縦者の養成である。鉄道省は旅客輸送、逓信省は旅客及郵便物輸送をやるべしだ。此等は凡て国防上に大なる貢献をなすのである、英米其他の実例を見ては吾々が決して偸安を許さないのである。化学工業の進歩（染料硫安）は軍事上より見ても喜ぶべきである。産業を盛んならしめ貿易は種々の障礙を突破して発展せしめ国富を増進し以て必要なる軍備を維持するの力を養成し、而して戦時輸入のとまるものに対し種々の応急策を講じ置く事は我国の国策とならねばならぬ。独乙は新進気鋭であるがあゝ云ふ風に経済力衰へ、原料も充分

に買ふ能はず随て貿易衰退するに於ては何とか巧妙なる転換を講ずるにあらざれば将来必ずしも楽観出来ないであらうと思はるる。我々は益々国富の増進を図らねばならぬ、小成に満足してはならぬ。而して政府に国力動員の計画あつて必要に際し之を断行し得る強力のものでなければならぬ。

四年前満洲事変あり此れは陸軍の偉勲である。続て上海事変起り日本と列国の感情は随分隔離し連盟脱退の事ありしが年と共に漸次収まつて来た。之は列国には戦ふ能はざる事情があり又日本国民の決心が強く陸軍も海軍も敵に廻しては中々強いから彼等は控目に出たのである。爾来露国は北満鉄道を手放し北満より退却した是は彼として止むを得ずやつた事であらう。国境には尚大軍が居り飛行機も数百台あり此等は数日にして増援され得るのである。露国従来の外交振りに顧み我陸軍は油断できないであらうと思ふ海軍は既往幾多の経験に鑑み華府条約廃棄を通告した、ロンドン条約も今の型式で連続する意思がない従て両条約共明年一杯にて終焉を告ぐる。随て新しき条約が生れざる限り無条約となるのである。要するに国家が発展し従来の着物では着る事が出来なくなり英米等の現状維持に対し新規蒔直しをやらうと云ふのである。

米国は満洲上海事変当時には文書を以て我に抗議したが、其時の海軍力を以てしては日本は一向遠慮しないと見てとり、其後条約の最大限迄充実の案を立て目下着々進行中である。航空兵力に至ては陸海共に大に充実しつゝある其上有力なる民間航空は陸海軍航空の予備となり得るのである。さて米国に戦意ありや否やは私として何等予言せぬがよからう、然し領土的野心はなからうが「ヘイ」以来の門戸開放、機会均等主義などは容易に捨つるとは思はない。

比島の独立は大分米国国防上の責任を軽減したと思ふ。比島は米国の弱点であつた。曾ては比島「ガム」島に大根拠地設置論などありしが華府会議以来其声をひそめ、今は布哇群島を前哨線とし真珠港の浚渫など大に進捗した様である。過日ミツドウエー島及アリユーシヤンに亘り大演習をなし、其後軍令部長は米海軍の力を以てしてハワイより比島に亘り作戦するに大に運送船を要すと云ふたと伝へられるそれは明なる事である。但し航空兵力の如きは比島へ必要に応じ増派し得べく又支那にも米国資本を以て相当に航空路を開拓してある、此等は軍事上軽視できないが私は米国の東洋に於ける勢力はよく見て現状維持（対支貿易は発達しあるも）日本の向上に対し退嬰である、これはやがて西半球に於ける英国勢力の減退と歴史を同ふするであらうと見て居る。

英は新嘉坡軍港を強化し香港と相俟て防備を固めつゝあるも欧洲の形勢其他に鑑み到底東洋に於ては現状維持以上に出ないと認む。勿論局所的には進取の策をとり西蔵新疆方面は勿論蘭領印度シヤム等に対しても大に関心を払ひつゝあり、上海は揚子江に於ける根拠地となし退却せざるべし。独乙海軍の再軍備あり仏伊之に随動すべく英国海軍は縮小する事は到底不可能、否ボルドウイン氏は「マツク」よりも一層拡張政策に出づる事は第一の「ラヂオ」演説を見ても明なり、是に於てか軍縮会議に於て各国「アツパーリツト」を下げ軍縮を実現するが如き見込はなく、本年軍縮会議の前途も見透困難なり英国は極東に於て単独日本を対手にするの困難を知る故に排日本主義のものは臆目もなく英米の提携を説く蓋し支那問題に於て彼等は提携する事あるべきも同盟する事なかるべきかと思ふ。但し米英の海軍間には昔と違ひ

漸次親密なる空気通ひつゝありと云ふ。

日本は東洋の安定勢力として平和を維持する事を標榜して居る、これに対し責任をとらねばならぬ。此政策を支持し得る軍備を要する。現在の混沌たる国際環境に就ては充分なる兵力を持たねばならぬ事となる。一方日本の人口増加国力の発展に伴ひ平和的に世界到る所へ進出せねばならぬ。今時は領土的野心を持つべからずと雖商買(ママ)上進出し又能ふべければ権益をも得ねばならぬ。然らざれば日本人は生活して行けない、之には是を支持する国力、兵力がなければならぬ。然し戦争は国家の死活存亡に関するにあらざればやれない日露戦争は我国は止むに止まれず開戦し国運向上を来したが、欧洲大戦に於ては戦捷国も戦敗国も非常に疲弊し今日の困難を招来した、独乙の如きは戦闘そのものに捷ちつゝあつたが戦争には敗れた、それは国力士気の挫折其背後には経済力の行詰りがあつた。戦争に於てうまくやつた国は米国と日本である。米国は丁度徳川である豊臣秀吉は那翁以上の大傑人であつた支那四百洲迄も征服せんとし、先づ朝鮮を征伐し大に武勇を揮ひ国威を発揚したが其隙に徳川は力を養ひ終に豊臣に代つたそれに似て居る。而しその米国も国内の経済が甘く行かず金あるも不景気に苦み政治問題で困り抜て居る。

北条時宗は元寇の困難に当り克く果断以て困難を救ひ大に神洲男児の面目を挙げた。それは時宗として戦ふより外に途がなかつた、祖元禅師の教ゆる如く莫妄想で一本筋を進むのみが日本を救ふ唯一の途であつた。鎌倉時代は武士道が盛んで凡ての中心をなし又神仏を尊び、勤倹主義で国家経済もよく整つて居つた時代であるが文永より弘安に亘り前後十八年殊に倹約をなして武備を修め元寇に備へた。弘安四年彼の大挙入寇に当り不幸にして海は彼に制せられ博多に侵入されたが神風起り之を全滅し得た、あの戦の後に北条氏は財政窮乏衰運来つたと云はれて居る。

日露戦争後も亦百方平和維持に努めたが最早戦ふより途がなかつたのである。司馬法に＝国雖大好戦必天下雖安忘戦必危＝とある之は千古の金言である。

徒に外国を挑発する事なく静かに自ら備ふべき備へ以て万一の用意をなし置くべきものである。

我に国家総動員の準備あり且精鋭の常備軍あるに於ては外国も容易に手出しせず、茲に名誉ある平和を保ち得る。勿論国家の大局より見て財政経済を破壊するが如き事をしてはならぬが此際は国際環境を大観して、こゝ数年時局の平静に帰する迄は軍備を充実し万遺算なきを期すべきである。

軍備には金が入るが国民の時局に対する認識の深浅によつて定まる問題で戦争になつた場合と比較して考ふれば其負担たるや比較にならぬ程軽いもので結局一番安価で我国策を支持し得ると云ふ事となるのである。油断し備へを怠らば戦争となる危険が多くなる私は米国の如きも聴ては我国の優越を認むるに違いないが我国民の態度如何により一層早く諒解し来るかと思ふ末梢的揶揄や嘲弄交換は大局の為に益ない寧ろ大乗的共存の大道を開拓すべきである。其他諸外国に対しても親善の態度を採るべきである。国際環境がよくなれば緊張を減じ軍備も軽減し得る事となる。唯機の熟する迄油断するなく備へて置かねばならぬ、短的に申せば今日の現情にては陸軍も海軍も縮減の如きは夢である。寧ろ充実し航空兵力の如きは大に力を入れねばならぬ、国民は此の内外の多事なるを達観し益々質実剛健の精神を強化し体力を養ひ知識を博めねばならぬ。而して国際的には東洋の君子国たるに背か

ず常に正を履み国際の信義を重んじ諸外国と親善を旨とし以て極東方面の低気厭を緩和するの途に出づべきである。外交当局のみならず国民亦其心懸けあつて然るべしである。斯くする中には漸次列国対立抗争の勢も緩和し自然軍事費も軽減し得る時代が到来するであらう。

要するに今日多事なるも之国力発展の為めの困難である国民が積極的進歩的なる故に起る悩みである。我国の国力は日露戦争頃に比すれは数倍して居る統計的に云へば英又は米に比し遠く及ばぬが東洋に於ては地理的優越と相俟って我に敵し得るものはない。故に我国民は大に自信を持ち静かに落付いて堂々たる大人君子の態度をとり真に名実共に東洋の安定勢力たらねばならぬ。（完）

非常時と我が国防

（本篇は日本青年館に開催の東京市連合青年団の大会席上に於いて述べられた講演速記である）

私は今夕この連合青年団の催しに喜んで出席したのであります。昨年もお約束してをつたのでありますが、公用で急に旅行いたしまして失礼したのであります。今日この約束を果すことを得て、喜んで此処へ出まして皆さんにお眼にかゝる訳であります。青年団は私は大きな期待をもつてゐるのであります、冀はくば諸君は大いなる志を以て、口ばかりでなく、これを実行して世の儀表になつて努力してほしい。それには諸君が自ら業を励む、農業、工業、商業、何れを問はずどういふ職務をもつてゐるにしても、その業を励んでそして国民の義務を十分に尽され、そして我国をます〳〵繁栄に到らしめん（ママ）ければならぬと思ふのであります。教育の勅語は我国民の向ふ処をお示しになつてあるのであります、そのうちに諸君の御熟知の通り国憲を重じ国法に従ひ義勇公に奉じ、そして天壌無窮の皇運を扶翼すべしといふ御文句がございます、諸君が飽まで国法を重じやつて行かなければならぬと思ふのであります。先達つての大震災の時分に日本国人は成程よく困苦に堪へた、外国人も感服した、然し私はあの震災の時、かういふ青年団の組織が今日の如く発達しておつたら、まだ〳〵立派な秩序を維持し、まだ〳〵立派にあの困難に打克つはずであつたらうと思ふのであります。将来のことを考へて見るといふと、平時においても諸君の為すべき仕事は多々ある、戦時においては尚更で、これからの戦争は国家総動員で、皆がやらなければならない、在郷軍人の人も召集される、さういふ場合を想像して見ると青年団の為すべき仕事は多々あると思ひます。外国でもこの国民の訓練といふことは此頃ます〳〵盛んになりつゝある。どうか諸君はます〳〵修養をやり、互に切磋琢磨してこの社会を浄化し、良いものにする、不都合なものはこの社会に存在し難くなるやうにしなくちやならぬ。衆議院へ議員を送るにも市会に議員を送るにも、良い議員を送るといふ風に、どうかます〳〵努力して、さういふ風に社会を浄化して行くやう御尽力ねがはなければならぬと思ふのであります。

御維新以来日本は非常に急に発展してゐる。私等が海軍に入つたのは恰度日清戦争後で、海軍の方面からだけでも日本の発展を見れば、それは驚くべきものがある。我々は日露戦争前の中尉、少尉時代には朝鮮を航海しても朝鮮の北の方は露国の勢力が多大であつた。その南部の鎮海湾馬山浦辺りに於てロシヤ艦隊は大に威張つてをつた、日露

戦争前の談判には満韓交換、満洲と朝鮮を替へるのだとか、朝鮮の北の方平壌以北を中立地帯となすなどの話があつたのであります。朝鮮全体を日本の勢力圏となす事は出来なくて、終に戦争となつたのである。そして露国の勢力ばかりでなく、英国も同盟国となつた初期には東洋に日本と拮抗する艦隊を置いてをつたのである。アメリカの艦隊もゐる。それから独逸の艦隊は支那の青島を根拠地にして相当勢力があつたのであります。日露戦争後三十年此間に彼等の勢力は漸次退却して、今日東洋においては、英国の艦隊とても到底日本の勢力に拮抗し得ない状況にある。然し戦時になれば、何れこれを応援されるでありませう。然し乍ら現在居る所の艦隊は我々に比し、遥かに劣勢な艦隊である。米国艦隊の主力は太平洋にゐるけれども米国沿岸及布哇辺りにをつて、東洋には大きな艦隊を置いて居らず、又大艦隊を動かすだけの施設も根拠地も平時には置いてゐない。露国の艦隊は殆どなくなつて今日浦塩辺りに若干の潜水艦などを浮べてゐる。独逸の艦隊もなくなつて、今東洋で威張つてゐる海軍は――真に東洋の覇を握つてゐるのは帝国海軍である。この変遷といふものは、随分急激であつたと思ふのであります。

過去三十年の経過を見て、国力の増進、国富の増加をば只日本だけについて考へて見れば大に喜ぶべしですが、然しながら世界全体の進歩を見、更に深く考へて見ると油断大敵であつて、これから諸君がだん〳〵社会の中堅分子として、大に努力しなければならぬと思ひます。第一に国民精神を強化し国力の発展に努力せねばならぬ。これが為には教育を振興し、又は産業を盛んにし、外国貿易を進展させ、国防を充実し国権を増進しなくてはならない。これは諸君の力によつて、実行によつてやらなければならない。貿易の状況を見るに、先年経済封鎖などの問題があつた時に、日本は外国と貿易をしなくても大丈夫だと云ふ説があつた、非常時に対してそれ丈けの備へがなくちやならぬ。然し、紡績などは今の所到底出来ない事になる。今日諸君も御承知の通り日本では紡績が非常に盛んである、がこの原料は米国及印度から五億、六億といふものを買つてゐるのであります。そして日本の工業力でこれを綿糸、綿布に仕上げて、外国へ輸出してゐる。羊毛の如きも何処から来るかといへば主として濠洲から来る、これも一億以上来る、それから我々が乗る自動車の燃料ガソリン、その他この頃の船は多く油を用ふるがこの油は内地においてあまり出来ない、大部分は外国から来る、米国、蘭領印度、露国あたりから来る。油の使用量はます〳〵殖（ママ）えるのに、内地には少ししか出来ない、北樺太から少しやつて来る。自動車が盛んになる、船舶に油を使ふことが多くなるに従つてます〳〵油は要る。今でも二百万噸位輸入してゐるのであります、莫大な金であります。それから鉄ですが、鉄なんか外国から買はなくてもよささうにも拘はらず、今非常に買つてゐる。米国から屑鉄をば百五十万噸も買つてゐる、一万噸の船百五十艘で持つて来るだけ買つてゐる。それから銑鉄も八十万噸買つて居る、銑鉄を作るブラストフハーネースが非常に不足である。銑鉄は印度、濠洲、露国などから買つてゐる。それから我々の乗る自動車ですが、我国ではダットソンとかいふのが出来るのですが、大概は外国製です。これなんかも我国の先覚者がもつと早く着眼して自動車工業を起し日本人が儲けるやうにしなければならなかつたのであります。此頃眼が醒めて着手してゐるといふ状態であります。フオードとかその他いろ〳〵名前のむづかしい自動車が走つてゐる、皆外国製であります、かういふ風に

外国から多く物を求め、同時に日本の産物を外国に送る、詰り貿易といふものは今日はトン〳〵に行つて居るが仔細に考へますれば日本でやらなければならない。内地でやらんければならぬものは枚挙に遑あらざる程あるのであります。国力を向上し、ます〳〵発展しなければならぬ今日の状況で、油断してゐる時ではないだらうと思ひます。自動車がないとか、鉄がないとか、内地で出来ないから外国で買ふ、文明国としてあまり自慢した話ぢやないと自分は思つてをります。

満洲事変は、四年前の九月十八日に起つたのであります。ついで上海事変が起り、それから連盟脱退といふやうなことがあつてこの間東洋——日本を中心として世界注視の的となつて実に多事多難であつたと思ひます。然しながら我国はこの間によく善処して、うまくやつて来て、そして満洲、上海に干戈を交へたが、これは大規模な戦争にもならず、今日満洲は独立国として成長し日本の力によつて着々発展しつゝある。国内の秩序もだん〳〵ついて来る、鉄道は縦横に延び、土匪はだんだん減つて来るといふやうな状況になつてゐる。それから連盟脱退に伴つて南洋諸島の、日本が委任統治をやつてゐるあの島々の帰属問題などが一時議論されたけれども、それも現状維持になつて、今日連盟でもあまり問題にしないやうな状況になつてゐるのであります。これは今迄の処うまく来てゐるのであります。その原因は畢竟するに挙国一致、上下力を併せてやつて来た、そして陸軍も海軍も強い、露支両国にして見れば日本の陸軍を相手に戦をすることは容易なことぢやない、また日本の海軍を負かすといふことは何れの海軍国としても容易なことぢやない、さういふ処からして今日先づこゝまでうまくやつて来たのであらうと思ひます。然しながら先程申したやうに軍備に於ても油断は飽迄大敵である。今日の戦争は国家総動員でやる。これは詳しいお話は今日いたしませんが、国力を挙げて闘ふ戦さである。欧洲大戦後、国力を総動員して戦をやるといふことは各国の建前になつて来た、国防といふものはさういふ観点に立つて行かなくちやならなくなつて来たのであります。政府の機構も国力総動員し得るやうに確かりしてをらなくちやならぬ。そして、この準備がチヤンと出来てをらなければならぬといふ訳であります。今後の戦争のことを考へて見るといふと、陸軍は飽迄も大陸においてどの国と事が起つても必勝のものでなくちやならぬ、必ず勝つといふ陸軍になつて貰はなければならぬ。海軍の方は太平洋に事が起つても必ず国防を完うするといふ海軍でなくちやならぬ。日本の国状から陸海軍が車の両輪、鳥の両翼といふやうな任務を果さなければならぬのであります。

これは一部の人からどうも日本の国力で陸軍も充実し、海軍も充実するといふことは困難だといふお話もありますが、然し成程英米の陸軍は劣勢であるけれども、英米には徴兵令を布いてゐるのではない。詰り傭兵で、陸軍海軍で費してゐる金は米も英も殆んど同額になつてをつて、矢張り相当の金を費やしてゐる、要するにデモクラシーの国であるから強い陸軍をもつてゐないが金は多く費やしてゐる。我国ではどうしても国状からして今いつたやうな大陸に事が起つた時分には大陸で勝ち得るやうな陸軍でなくちやならず。太平洋に事が起つた時分には太平洋で勝ち得る海軍でなくちやならないのである。露国との関係を見ても私は露国が北満の鉄道を離したといふことは、畢竟するに日本の力が強いから、あそこでやつてもやりきれないから、それで手放したのであると思ひます。外務大臣その他外交当局の折衝宜しき

を得た其功績は充分認めねばならぬが然し力がなかりせば如何に外交当局がうまくやつても、あの結果を招来することは出来なからう。要するに背後に力があるからして露国が北満鉄道を離すといふことになるのであります。また、あの問題が解決したといふことで、直に日露の間の関係が枕を高うして行くといふ訳にはいかぬ。極東に十幾万の兵を置き飛行機が三百台とか、四百台あるといふことを我々は聞いてゐる、戦時の事を考ふるに当り極東に送つてゐる飛行機だけを勘定して、本国のを勘定しないといふことは、それは飛んでもない間違であります。露本国から極東へ飛んでくるといふことは、今日何でもない問題であります。汽車で歩兵、砲兵、騎兵といふ兵隊を送るには非常な日数がかゝるが、飛行機が飛んで来るに訳はない十日も汽車でかゝる処を一日か二日で来る。従つて本国にある飛行機を必要に応じて極東に飛ばせばいゝのだ。

露国はだん〳〵内部が整頓して来る。両国の関係をよくすべく我政府及び外交当局が努力することは誠に結構でありますが、国防当局が只努力だけで安心出来ないのだから、矢張りそこに現実の問題を掴まへてそして国防を完うしなければならぬといふことになるだらうと思ひます。

次に主として海軍の関係を申上げます。海軍は東洋で覇を争ひ戦をなし得るやうな海軍は英若しくは米だけなのであります。然し英、米といふやうな大国は皆現状維持で、今までの優勢を壊さないやうにしやう、そして後進国日本に追随を許さないやうにしたい、然し日本はそれに満足出来ない、若いものはそれを追抜くやうに追付く様にしたい、彼等はさせないやうにする其処に両方の主張に間隔があるのであります。先達の軍縮会議なんかも諸君の御承知の通りだ、然し英国海軍の現状は最近の新聞に出てゐるやうに、政府は減らし得る処まで減らした、あまり減らし過ぎた。従来は平和機構にあまり頼り過ぎて減らし過ぎたが、これからは充実するのだと、かういつてゐる。前の英国総理大臣マクドナルドは労働党の人で軍備の充実といふやうな点には、反対といふ程でもないかも知れませんが、急先鋒でなかつた。然しながら永い総理大臣をしてゐる間にだん〳〵現実を見てみるといふと、条約といひ、平和機構といひ、多く頼ることは出来ない。英国も今日は軍備を極度迄減縮してゐる、これから建直さなければならぬといふやうに頭が変つてゐたのであります。それで今の海軍をば更に少くしやうといふやうな意思は毛頭ない。英国は極東に於てシンガポールに軍港を作りつゝある、最近に至り着々工事を進めて居る、英国人はあまり喋べらないけれども着々実行するのであります。

マクドナルド首相になつてからシンガポール軍港の十年計画でやつて居つたのをずつと延した。処が英国政府は極東の政情に鑑み、最近にはこれをば速成するやうに、促進するやうに努力してゐるのであります。それからシンガポールには空軍の施設もだんだん整つて来てゐます。英本国の大臣連がシンガポールまで飛んで来て見てゐる。英国と新嘉坡との間に定期の航空路があるのであります、この間も浅野合名の浅野良三君がそれに乗つて来て、英本国から夜泊つて一週間で飛んで来る、早く来ればもつと短縮出来る、先程露本国に飛行機が非常に多い、必要あらば極東にどん〳〵送り得るといつたが、それと同じやうにシンガポールへも必要あれば、或は印度から或は濠洲とか本国から集中せしめることは何でもない、そんなに空中旅行といふことは

簡単になつて来てゐる。夜寝て英本国からシンガポール迄九千哩、一万哩を一週間で来る、少しきばれば四日か五日で来る、和蘭辺りから蘭領印度のバタビアへ四日で来り得ると思ふ。非常に進歩してゐるのであります。

それから米国の方は海軍はどうかといへば、二割減らしでいゝとか何とかいふが、あれは大体古い艦を減らすといふ事になるのであつて。先づ英国海軍と同勢力なるものをもつを目標としてゐるのであります、諸君五、五、三といへば英国も五持てば自分も五持つ、日本をば三にしやうかういふのである。この英国と米国とは所謂英語国民で、海軍の問題については日本に対して優勢をもち、三に対して五を持たふといふ、そして英米同等の勢力と大体の処において一致するのであります。然しながら英国も、米国も互に同盟といふことは容易に出来ない、が海軍問題に限らず東洋問題で往々両国の協調はあり得べき事で、両国の関係には注意を怠らないやうにしなければいかぬ。そして英国は今ヨーロツパの問題が非常に忙しいために、極東に於ける艦隊もさう大勢力でない、シンガポールに軍港を設け必要に応じ勢力を集中し得るやうな準備はもつてゐるけれども、東洋に於てはあまり積極的ではない、支那においても現状を維持して行かうといふやうな状況であります。然しさういふ大筋ではありますが、矢弱り(ママ)イギリス人は怜悧だから例へば蘭領印度にせよ或は「シヤム」にせよそこに勢力を植ゑるといふやうに、何時の場合でも怠らない。イギリス人はなか〳〵偉い国民である、欧洲大戦のあの忙しい間に「メソポタミヤ」辺りの油田に着目しアングロ・ペルシヤ・オイル・コンパニーといふ何億といふ大きい資本会社を拵へる。そこから地中海の海岸迄パイプラインを造り今日は三百万噸も四百万噸も出て来るといふやうな処から見て、一方保守的に見えても自分の利益はなか〳〵離さない。あまりしやべらない人種であるけれども自分の権益を擁護するといふことはなか〳〵やる。英国が今日百年余もヨーロツパであれだけ覇権を握つてゐることは英国の長所で口に訥なるも行に敏なりと申してよからうと思ひます。

米国も極東に対しては軍事的に見て、一時程積極的ではない、一時は比島又グワム島に大なる海軍根拠地を設け、極東を睥睨するといふやうな考へが欧洲大戦の間にあつたのですが、然しながらワシントン海軍条約以後あたりからして余程その態度が変つて来てゐるのであります。今日ではフイリツピンの独立問題なども大分進み、今のルーズヴエルト大統領は将来十年で独立を許し、陸軍を引揚げて、海軍の根拠地はその時の問題にするといふやうな態度である。勿論まだ如何にかはるや分らない、只今力を注いでゐるのは太平洋岸の諸軍港の施設、それからハワイの真珠軍港施設に金をうんと掛けて居る。

世界では日本と米国とが戦争することを希望してゐるものはこれは沢山ある。また日本と露国と戦をしてくれと祈つてゐるものも、これも沢山ある。先程大分飛行機のお話をいたしましたが、航空兵力の充実、そして航空路の開拓といふやうな点においては、我国は軍部に限らず一般国民はもつと関心を持たなければならないと思ひます。これは先程自動車の遅れてゐることを申しましたが、航空も今のやうなことをやつてをれば必づ非常に遅れた国になるだらうと思ひます。もつと国民は奮発しなければならない。今日一番航空技術の発達してゐるのは米国であります。然し私が十七、八年前米国に勤務してゐた時分

には、まだ飛行機といふものは一向なくして、欧洲大戦に従事してゐる英国、仏国、伊国の飛行家を呼び、飛行機を取寄せて、そしていろ〳〵見本により実験してゐるやうな状況であつた処がこの十五、六年の間に非常な進歩をしてゐるのであります。もうロスアンゼルス。ニユーヨークの間三千哩を鉄道で今まで五日間であつたのが飛行機にて普通十六時間で行ける。夜でも昼でも行ける。其他縦横に航空路があるのであります。それから国内のみならず今はメキシコ、カナダ、中米、南米にも延びそれだけの発達に満足せず、支那辺りまでやつて来て上海を中心にして、そして漢口、宜昌、重慶、成都辺りまで皆アメリカ飛行機が飛び上海、北京もやつてゐる。例へば重慶へ上海辺りから行くのに汽船で十日もかゝるのが飛行機で行けば十時間位で行ける。

英国もこの頃シンガポールより濠洲に延長する話もあります。欧洲大陸の間はどんどん毎日何回もやつてゐるのでありませうが、シンガポールまで一週間かゝるのをやがて五日にし、四日にしようといふ勢であります。この航空路の開拓に於て日本の航空路はどうか、満洲朝鮮を含め南洋台湾辺りのことを考へて見るといふと、もつと発達せしめなければならない、大に力を注がなければならぬと思ひます。それから民間航空の発達といふものは、矢張り陸海軍の航空力の予備に力強いものになるのであります。アメリカは民間航空が発達して海軍、陸軍の力を増すことは非常なのであります。この頃海軍で彼等の方では航空家を多く要する場合は民間から採つてゐる、そして海軍自体で養成すれば二年もかゝるのが、或ひは一年で間に合ふ、民間航空と海軍とは大分状況が違ひますけれども、それでも二年かゝるものは一年、或は一年以内で用をなし得る、それは非常に軍事上から見て予備兵力になるのであります。

日本の今の民間航空といふものは発達した国に較べて見ると遺憾ながら零だといつていゝ。ないといつていゝ。少しある位で、陸海軍の航空は最近は大分発達して来たのであります。海軍の方も発達して来て、これに従事してゐる人は献身的に努力してゐることは、これは国民諸君に於ても充分御諒解下さらなければならぬことゝ思ひます。昨年の如きは五十近くの殉職者を出し、負傷したなんかといふのはこの以外にまだ沢山ある、この位努力してゐるのであります。日本軍人といふのは戦闘力が旺盛である、一旦緩急ある折は上空で戦へば決して外国に負けない、上海事変のロバートシヨウト機撃落しなどの場合でもよく戦闘力の旺盛を物語つてゐる、だん〳〵進歩しつゝあるのであるけれども技術の点に於ても、用兵の術に於ても連綿不断努力しなければならないのである。これは陸軍も同じだらうと思ひます、露国に対して備へる上でも陸軍の現在の航空兵力だけでは満足出来ない、非常の場合は陸海軍協同するでせうが、それにしても陸軍ももつと増加してほしい亦海軍も出来るだけもつと発達してほしい。民間航空はまあ聲を大にしてもなか〳〵急に米国やヨーロツパ諸国のやうな状況にはならんですから、これは矢張りあまり当てにせず陸海軍用の航空力を充実しなければならない状況にあると思ひます。米国海軍の航空兵力は漸次増加し陸軍の航空兵力も増加しつゝあり其上民間のパイロツトが非常に多い、これは非常な予備になる、さういふことを考へ、欧米の状況を考へて見る時に我国の現状では決して満足出来ない、航空路もうんと開拓しなければならぬ、これは商船航路の開拓と同じやうな状況なんだらうと思ひます。

何故海軍で航空機が必要だといふと、これは海軍において航空力といふものは近世艦隊において欠くべからざるものになつてゐる、敵状視察する、それからして自ら爆弾を持ち水雷を以て敵を攻撃するのみならず、今日の鉄砲なり水雷なりの効果を挙げるために飛行機の助力を必要とする。遠距離で敵を撃破するのですから弾の落ちる処を、着弾を的確に命中するやうに、飛行機で今近い遠いを教へて当るやうにしなければならぬ。それだから先に艦隊の戦闘には空中を制したものは非常に有利になる、敵にさういふことを知らしめずして自分の方の弾着を指導する。敵にやらせずして自分のみよく偵察し爆弾、魚雷の襲撃但しは奇襲を加へ得る事になる先決問題は艦隊の戦闘には我先に空を制する、制空といふことが必要なのであります。それには敵の航空母艦といふものは沢山の飛行機を積んでゐる。それに止めを刺すといふことは一ぺんに五十機なり六十機に止めを刺すことは一番いゝのだから、それだから敵の航空母艦といふものは潜水艦、巡洋艦、駆逐艦其他の兵力を以て早く射ち止めたい、また飛行機で航空母艦を射ち止めたい、空を制するために航空母艦を敵に先んじてやつつける。そして自分が空中を自由に使ふといふこれが非常に良いのであります。

それから各地で防空演習なんかやりますが、これは矢張りさういふ訓練はやられてしかるべきだと思ふ。敵の航空母艦をして我近海に——近寄らしめずといふことが一番必要なのでありますが、然しそれは海軍力でやらなければならぬのだが、然し如何なる場合でも、例外といふものが起つて航空母艦といふやうなのが、我警戒をくゞつて東京の近所に現はれるだらうと思ひます、日露戦争の時分、浦鹽艦隊が東京湾付近を徘徊したことがあります。如何に努力してそしてさういふことをやらすまいとしても、こつちの力が強ければ航空母艦を沿岸に近づかしめずといふ原則でありますが、物は原則通りにはいかぬので、ある場合は例外として現はれて来る。これに対して防ぐのは航空兵力を以てする、其上砲及其他の工作を以て防ぐ最後の場合は防火防毒の施設により被害を最小限にする、消極的な防禦防御も必要である、この際には市民がよく訓練されてをつて、秩序維持といふことも必要である。

最後に今まで各国の状況を説き、空軍の充実の必要なこと、陸軍も海軍も大に整備して置かなければならなぬといふことを申上げました。これを一つつまんで申上げます。軍縮条約、これは先程申したやうに英といひ、米といひなか〳〵兵力を減らさない。そして彼等は現状維持で、後からやつて来る新進気鋭のものを何時までも子供で置かうといふのが彼等の腹であります、さういふ状況で果して我等の所望を盛つた条約が出来るか否か、略々想像がつく話であります。然し当局は日本の主張が通つて軍縮をまとめたいと申す。これも尤もであり、また外国に対する儀礼としてさういふ風にいはれるのは尤もであります。然しながら我々軍人としてはさういふゼスチユアといふか、身振に重きを置かず、現実な冷たい事実を認識して自彊の策を採るものであります。日本の国は先程申したやうに日露戦争当時に比して国力は数倍してゐるのであります。数字を示すことは出来ないが、日露戦争時代に比すると力は数倍してゐるのであります。日露戦争の軍艦といへば、これ皆英国その他欧米へ註文して出来たもので、小さい艦は日本で出来たがはじめ出征した十九隻の駆逐艦さえ皆英国製造である、さういふ時代に比べて見れば今の兵力といふものは非常に進歩してゐるのであります。国民が挙国一致して進むにおいては、今の時局

に善処し得るといふことは極めて明瞭であると思ふのであります。只国民精神の強化といふことは始終いふてゐるが、それらの点において今日は言論は極めて雄であるが、それだけ己れを犠牲にして公に奉ずる精神が発達してゐるとは思はれない。それは今の人を侮辱するやうに聞えるが、曾て明治天皇様が宮廷費の一割をお割きになつて、官吏も俸給を一割さいて、そして富士、八島といふ二隻の戦艦が出来たのである。今日の時局は非常時局だ、非常時局に相違ないが、さういふことを今日出来得るや否や、やつたらやかましい不平が出るであらう、さうすれば其処に時局に対する認識といふか、時局に対する覚悟といふか多少差があるといふ風に私はさう見てゐるのであります。

然し今の時局は私は戦争になるといふことは、決して予言しないが、内外多事であります。かういふ非常時局は相当永くつゞくものと思ふ。それだから国民は十分に持久の覚悟をして、そしてこれに善処して行かねばならぬと思ひます。海軍、陸軍について先程申しましたやうに兵器の整備と共に飛行機の充実といふやうなことをやらないと世界に後れるといふ点が多々ある。随而当分軍事費に多くかゝるといふやうなことを覚悟して行かねばならぬと思ひます。勿論海軍のための海軍拡張であつたり、陸軍のための陸軍拡張であつたり、相競つて国民の財布を奪つて行くといふ、かうなつたら大変でありまして、それでは国防が財政を壊すやうになる、さういふ考へは毛頭ない、万一さういふ考へが一寸でもあれば非常に悲しむべきことであります。否々陸軍も海軍も一銭と雖も国民の膏血であるといふことを承知して、浪費を戒めねばならぬ事は申す迄もありません。同時にかういふ時期に際して、内には産業を盛んにし先程申上げた如く貿易をも盛んならしめ、国が富み、国民の方で軍費を維持し、国家に相当施設をなし得るやう、力が増して来なくちやならぬ、また増すやうにしなければならぬのであります。国といふものは自ら戦ふだけの用意ある国ではじめて名誉ある平和を保つことが出来るのであります。然らずんば彼に叩頭する外はない。今日の対外多事の秋、名誉ある平和を維持して参りますには、何時でも戦ふのだといふ位の処まで、国の機構、準備が整つてをらねばならぬのであります。

何れの国も欧洲大戦後、まさかの場合は総動員といふ計画で、そして準備してゐるのであります。国家総動員の戦争に於ては非常に金を要するのでありますが、国家はそれだけのことをやむを得ざる場合には、敢てやるといふ準備が国家になくちやならない。さういふやうな点から考へて見るといふと国費が多く要るといふやうなことは、誠に小さい問題であつて、さういふ処に油断してゐるのは世にいふ一文惜しみといふことになる。今日の時局ではよろしく内外の形勢を達観して、十分に備へを為し自らの力らを信じて、国家が進むべきものである、然しあまり空騒ぎはよくない、犬の遠吠えのやうな態度を始終採つてゐるといふことは、決して国家を利益するものではない。静かに自ら備へ可き点は、実力を以て備へる、外交官はこの緊張せる方面について、いろ〳〵工作をやつて行くというふことは当然であつて、そしてます〳〵さういふ方面に努力されやるべきであります。露国及支那関係の緩和、英、米関係も緩和するやうに、従つてこの軍備競争の余計にならないやうに、要するに軍備というふものは相対的のものである。彼も少なければこつちも少くていゝのだ、国民もさいうふ方面で、各国との関係もよくする様協力するのが当然であらうと思ふのであります。

また我々軍人としてはその間に飽く迄も赤裸々な事実を掴んで不覚を取らぬやう努めることが必要であります。また国民も現実をよく透視して、大国民の態度を以て善処することが必要であります。（完）